

琉球大学学術リポジトリ

ユタと首里十二支寺

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-12-18 キーワード (Ja): ユタ, チジファ, カミ, 仏教, 守り本尊, 仏 キーワード (En): 作成者: 浜崎, 盛康, 安次嶺, 勲, Hamasaki, Moriyasu, Ashimine, Isao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/14087

ユタと首里十二支寺

浜崎盛康

Moriyasu Hamasaki

安次嶺 勲

Isao Ashimine

On Yuta and Jyunisi Temples of Shuri

キーワード：ユタ、チジファ、カミ、仏教、守り本尊、仏

はじめに

周知のように、ユタ⁽¹⁾の人たちは首里の臨済宗妙心寺派の寺院である慈眼院（首里観音堂）、西来院（達磨寺）、安国寺、盛光寺を巡拝する。ユタといえは沖縄の伝統的な民間信仰の担い手であるが、そのユタがなぜ仏教の寺院を巡拝し、菩薩や如来を拝むのであろうか。逆に、それらの仏教の寺院の方はユタが巡拝することについてどのように考えているのだろうか。本稿はそのような問題意識に基づいて、ユタと首里のそれらの寺院との関係およびユタの信仰と仏教の関係（特にチジファと守り本尊との関係）を、実際のインタビューを基に考察するものである。

なお、インタビューしたユタの方はお二人で、一人は那覇市首里在住のMさん（60代女性）、他の一人は宜野湾市在住のIさん（50代女性）である。インタビューした仏教の寺院のご住職さんもお二人で、一人はA院のご住職さん、他のお一人はB寺のご住職さんである。記して、感謝をいたします。

ただ、特にユタの方の人数が限られているので、本稿の考察がどの程度の普遍性を持つのかは、さらに調査を進めることでしか確認できない。その意味では、本稿はきわめて限られた範囲内での考察である。

なお、インタビューは2009年5月から6月にかけて、ユタの方はそれぞれのご自宅で、寺院のご住職さんはそれぞれの寺院で行った。

また、執筆は浜崎がⅠを担当し、安次嶺がⅡを担当した。

Ⅰ ユタから見た仏教

1 首里の仏教寺院へのユタの参拝と十二支の守り本尊

まず、首里のいわゆる十二支寺へのユタの人たちの参拝について、周知のことではあるが、確認しておこう。調査期間中、首里の慈眼院（首里観音堂）、西来院（達磨寺）、安国寺、盛光寺で、多くの参拝者を見ることができたが、その中には沖縄のヒラウコー（クルウコー、シマウコー）等を携えて拝みをしているユタ・カミンチュと（おそらく）そのお客さん⁽²⁾とおぼしいグループを何組も見かけた⁽³⁾。

さて、ユタのMさんは上述のように那覇市首里に住んでおり、沖縄本島の北部や八重山等からもお客さんが来る著名なユタである。十二支寺の巡拝について、次のように、ミフシ（守護仏、守護神）、干支に応じて、四つの寺院を全部廻ると述べている⁽⁴⁾。

Mさん：先祖は、ほら、かならず虚空蔵菩薩（Mさんのミフシ）っていうのではないですよ。一応十二支はみんな廻ります。

Iさんも、他のユタから相談を受けることのある信頼の厚いユタであり、次のように述べている。

Iさん：カミンチュは、みんな、拝みの時に、お寺回りするんです。ミフシって言うんですけど。観音堂から回るんです。なぜ観音堂から回るかって言うと、子ウクシ（子おこし）するんです。十二支は子から始まるでしょう。子ウクシって言うんです。そして、観音堂回って、次、

安国寺行くんです、不動明王。そしてここ行ったら、あの、だるまお寺行くんです。だるまお寺行って、最後に盛光寺行きますけど、ここは未申なんですけど。

そのように、ユタの人たちは自分自身の場合もそうであるが、お客さんの依頼を受けて十二支寺を巡拝する。これは「首里十二カ所巡り」と言われていることも、よく知られたことであろう。

次に、上記の臨済宗寺院には、それぞれ次の仏（如来、菩薩、明王）が祀られており、十二支の守り本尊となっていることも確認しておきたい。守り本尊信仰については本稿のⅡで詳しくふれるが、干支の十二支のそれぞれに仏教の仏が守護神（仏）として割り当てられている。慈眼院（首里観音堂）に祀られているのは、千手観音菩薩、虚空蔵菩薩、普賢菩薩、勢至菩薩で、千手観音菩薩は干支の子の生まれの人の守り本尊、虚空蔵菩薩は丑と寅、普賢菩薩は辰と巳、勢至菩薩は午の生まれの人の守り本尊である。西来院（達磨寺）には文殊菩薩と阿弥陀如来が祀られており、文殊菩薩は卯の生まれの人の守り本尊、阿弥陀如来は戌と亥の生まれの人の守り本尊、安国寺には不動明王が祀られており、酉の生まれの人の守り本尊、盛光寺には大日如来が祀られており、未と申の生まれの人の守り本尊である⁽⁵⁾。

2 ユタのチジファと守り本尊、仏

ユタの人たちは、自身の十二支の守り本尊とは別に自身のチジファを持っている。チジファとは、ユタの人を教え導くカミのことで、チジブン、チジガミ、あるいはチジスーなどとも言う。ユタは一人一人それぞれ独自のチジファを持っている。たとえば、ユタのMさんは、自分のチジファは「儀保の大阿母志良礼」だと述べており、Iさんは自分のチジファは「ヨーデー神（兄弟神）」であると述べ、右に男神のウミキーと左に女神のウミナイがいると言う⁽⁶⁾。

では、そのチジファと守り本尊、あるいは仏教の仏とはどのような関係になっているのだろうか。

2. 1 チジファと守り本尊

まず、チジファと守り本尊、カミと仏についてのユタの方の考えを見てみよう。

<Mさんのチジファと虚空蔵菩薩（守り本尊）>

浜 崎：Mさん、生まれ年は寅ですから、虚空蔵菩薩ですよ。

Mさん：はい、そうです。ミフシがですよ。

浜 崎：虚空蔵菩薩はもともと仏教の仏さんですよ……

Mさん：だから、自分のミフシ、

安次嶺：え〜と、つまり、祖先のカミがいますよね、それと、これ、虚空蔵菩薩は仏教の仏さんですよ、そのへんは同じと考えているのでしょうか、それとも、違うと考えているのでしょうか。

Mさん：いやいや、先祖がありますよね。先祖があつての我々ですよ。内地でもですよ、ブッタのあれでね。中国からのミチでありますけど、中国との関係は沖縄が強いです。はい。沖縄はそれだけ先祖のミチもしながら仏教のミチも取り入れて……これだけ中国に、先祖が唐旅して、行ったり来たりしていますでしょ、その行った手本ということで観音、御観音、持っていらしてますよね、そのミチからの関係だと思えます。はい。だから、切っても切れないですよ。ん、仏教のミチもね。だから、寅ヌチュナイネー（寅の人であれば）、丑寅はいっしょですから、虚空蔵菩薩っていう、自分のミフシなるわけですよ、守護神なるわけですよ。して、その守護神のミチスジ、その自分のチジファっていうのは違いますよ。チジファっていうのは、

私はIドンチのシソンですから、

浜崎：儀保の大阿母志良礼、

Mさん：はい、聞得大君や儀保の大阿母志良礼のミチスジからいただいたチジファです。

⋮

浜崎：仏教の仏様とチジブンっていうのは、

Mさん：ぜんぜん違います。

浜崎：どっちが上とか下とか、

Mさん：いやいや、これはないです。ないんですけど、その、自分のチジファは先祖からですよ、先祖のミチから何代ってということで、いただく……これからのミチが来ますから、あの、仏教のもんとは違うんですよ。

安次嶺：で、え～、違うんですけど、Mさんにとって、虚空蔵菩薩はどういう位置にあるんですか。たとえば、上ですか。

Mさん：いえ、これはないです。やっぱり、自分のチジファよりはちょっと下がりますね。はい。この、だから、仏教が入ったのはナカヌユー（中の世）のミチからですから、このチジファっていうのは、ずっとうえになりますからね。ガマユーグラシ（洞窟暮らし）でしょ。そのミチからのバン（判）ですからね。やっぱり、チジファよりは下です。判断する人の中にはイマバン、イマのハンダンとする人もいますよ。亡くなった人の。この人たちは仏教よりは下がりますよ。はい。亡くなった人のね、ミチスジ。

Mさんは、このように仏教と沖縄は関係が強く、切っても切れないと述べている。というのは、沖縄の先祖が唐旅（中国への旅）を繰り返しており、それによる手本（褒美、御利益）として観音を持ってきており、強いつなが

りができているということであると言えよう。いわば、断ちがたい強く深い因縁が生じ、結ばれているということだと考えられそうである。

しかし、だからといって、仏教の仏とチジファが同じというわけではない。Mさんは、チジファはカミとなった先祖であり、仏はミフシ（守護仏、守護神）であり、つまり、チジファは沖縄の先祖の系統だが、仏教の仏は別系統で、中国からのミチであると述べている。また、後で見るように、両者は果たす役割も異なっている。

チジファと守り本尊である虚空蔵菩薩との上下関係については⁽⁷⁾、Mさんは、基本的には両者の間で上下はないが（系統が違うので）、しかし、強いて言えば（というニュアンスかと思われるが）、自分のチジファよりは少し下がると述べている。理由は、ユタ特有のいわば時代区分である「イマヌユー（今の世）、ナカヌユー（中の世）、ウサチヌユー（お先の世・大昔の世＝ガマヌー（洞窟の世、つまり、洞窟に住んでいたことに象徴される古代）」に基づいて述べられている。Mさんのチジファの方が少し上ということになるのは、仏教が入ったのは「ナカヌユー（中の世）」からであるのに対して、Mさんのチジファはそれよりも古い由来を持ち、ガマヌー（ウサチヌユー）からのものであるからだということである。しかし、そうであれば、イマバンの判断を取る人は、仏教の仏よりも下がることになるのである（亡くなったばかりの人を対象にしているからということがその理由ということになるだろう）。

< Iさんのチジファ、カミと仏 >

・ Iさんのチジファ

Iさん：私は一人二役するんですよ、カミ様が。それで、男神にウミキーっていうんですけど、ウミキー、ウミナイって言って、私は両方もっているもんですから。……兄弟らしいんですけど、男女で、夫婦じゃなくて……

浜崎：こう、二つという、どんな感じなんですか。あわさって、右左、半分ずつ、

Iさん：カミ様……二人で一つになってやるのがあって、私の場合、主にタキシシンと言って、井戸とかありますよね、そして昔ここに拝所があったところをつぶしてマンションが建っているとか、家が建っているとかっていっても、これが見えるんですよ。元のものが、見えるんですよ。……元どういうところだったっていうのが見えるわけですよ。それで、そういうタキシシン、カミバンなんですよ。要するにカミ様が祀られていた、カミ様関係のものが降りてくるもんですから。

・ Iさんによるカミと仏の関係

Iさん：あの、カミ様っていうのは、人間からなる、人間がカミ様。亡くなって、浄化されて、たとえば普通の人の汚れたままでは、カミ様なれないんです。……で、して、カミ様に近づくためには、何をしないといけないか、仏教の教え、仏様の教え。要するに、自分はどのような価値があるのか、自分はどの程度なのか、自分はどうなっているのかっていうのを、見定めさせる、見極めさせるのが仏の教え……ですから、人が亡くなって三十三年忌までは、この仏教に、仏様に、で、これを終わったらカミにあがるっていうのがあるんですよ、私たちの世界では。カミアガイ（カミ上がり）スンドー（するよ）っていうことがあるんです。洗われたんです。簡単に言えば。浄化されたんです。今までの卑しい心とか、善悪、悪いことした、何した何したっていう、要するに、言えば、初七日から四十九日とかっていうのは、裁判かけられているんです。人が。この、グソーのカミ様に。あなたはこういうことがあったな、……はい、第1回目終わって、はい、また、次、^{またなのか}二七日のカミ様、仏様に渡されるんです。……

安次嶺：で、その～、カミと仏は上下とかあるんですか。どっちが上とか。

Iさん：やっぱり、これは、え～、私のあれからしたら、カミサマって言うのは、一個とか二個とか限られた数ではないので、全てカミサマになるので、私から見たら、カミサマの上があるかって言えば、仏教、仏界、仏様って言うのは、やっぱり位は、私、上じゃないかなって思う。

Iさんのチジファはチョーデーガミ（兄弟神）で、右に男神のウミキー、左に女神のウミナイがつき、一緒に動くと言う。このチジファの力によって、以前カミと関連のあった井戸が見えたり拝所が見えたりするのである。上にはインタビュー内容を紹介していないが、不調を訴えるあるお客さんの場合には、住んでいる家が以前はノロ達が祈りを捧げたカミジャグン（神座根＝神が鎮座する所（『沖縄の御願言葉』））であって、ノロ達が祈りを捧げる様子が見えたとも述べている。

カミと仏の関係については、主に、亡くなった後三十三年忌を終えてカミアガイ（神あがり）するまでの期間を念頭に置いて説明してくれた。人は亡くなって初七日等の七七忌から三十三年忌まで、何事もなく平穩に過ぎるのではなく、カミに近づく（カミとなる、カミアガイする）ために、グソーのカミ様、仏様によって次々と裁判にかけられ、正され、洗われ、浄化されることになるということである⁽⁶⁾。仏様の教えによって、自分がどうなっているか自分の状態を見定めさせられ、何をしないといけないか知らされることになる。

カミと仏とに上下があるかという質問には、多少考えながら、仏が上じゃないかと思うと述べている（少し後では、もう少し断定的に「段階はありますよ」と述べている）。理由は、カミは数が限られていず、すべてカミサマになる（なれる）からということである。インタビュー内容は省略したが、他に理由として、仏は人間がなるが、カミは自然のものということも挙げている。たとえば、花を生けてこれを拝めば「ここにのるわけですよ。」その

ようにして、自然はカミサマとなる。風も雨も水も石もカミサマだと述べている。

2. 2 チジファと守り本尊の役割

次に、チジファと守り本尊には、祈願内容に応じて何か役割の違いがあるかどうか訪ねた。

<Mさんの場合>

浜 崎：あの、こんなことを知りたいときはこっちとか、そういうことはありますか。

Mさん：あります。はい。

浜 崎：こういうときは虚空蔵菩薩とか、そういうことは、

Mさん：うちはイマメーの人の判断はしません。イマメーって言ったら亡くなった人ですよ、四十九日ならないうちに、何か不足分はないかと判断する人の所に行って、何々持たしなさいっていったり、この人何が不足だったよってというのがイマメーの判断する人の役目ですから私はやっていません。

浜 崎：虚空蔵菩薩はどんなときに、

Mさん：いや、虚空蔵菩薩は自分のミフシなりますから、観音堂にあがっているんですよ。はい。千手観音とね、丑寅の虚空蔵菩薩、午の勢至菩薩、辰巳の普賢菩薩が、今、観音堂にあがっています。前は万松院にありました。して、地藏菩薩と薬師如来が観音堂にあるんです。……だから、皆さん拝みするときは、ミフシからいって、ミフシの力も貸してくださいっていうことでお祈りするわけです。

浜 崎：あの、具体的にあれですかね。ミフシの力ってというのは、たとえば、健康とか運とか、そういう、

Mさん：はい、はい。運勢とかですね。来年は寅年になりますよね。10月過

ぎからは、いり厄に入りますから、引っかかる人は引っかかるしね。だから、普通の37、73の人は八方塞がりにあたるんですよ。十二支の真ん中に入りますから。そのときは注意しなければならない。メーメーヌ（各々の）ミフシのお祈りしておけば、無難に済むってことです。それで、十二カ所なんかに行って健康願いをするわけです。

Mさんは、自身のチジファと守り本尊とでは、役割が違うと述べている。チジファに関しては、ここでは「イマメー」について述べているだけであるが、インタビュー内容は省略したが、それ以外にも、自分はカミバンであり、さらに「イマ、ナカ、ウサチ」の三つ持っていて、「今ぬ世、中ぬ世、大昔ぬ世（神ぬ世）も見る」とも述べている。自身のミフシである虚空蔵菩薩については、運勢等に関係しミフシの祈願をちゃんとやっておけば、大きな災いに見舞われることもなく無難に済むというわけである。

< Iさんの場合 >

Iさん：カミンチュは、みんな、拝みの時に、お寺回りするんです。ミフシって言うんですけど。観音堂から回るんです。……最後に盛光寺行きますけど、ここは未申なんですけど。して、これがまた何々ってあるんですよ。この盛光寺っていうところは、仏壇ごと、グワンズバン（元祖判）、グワンズグトゥ（元祖の事）が先祖から、サンミン（計算、判示、判断）が降りる所なんです。この家は、たとえば、仏壇があるけど、ウッター（この人達）仏壇にあずかりグワンズがあって、チョーデーカサバイ（兄弟重なり）があって、ヌーヌアン（何がある）、ヌーヌアン、ヌーヌアンっていうの、ここで私が拝みながら全部ここから全部おりてくるんです。

Iさんは、ここで、特に盛光寺に言及している。盛光寺に祀られている十二支の守り本尊は大日如来であり、Iさんのミフシ（普賢菩薩）ではないが、盛光寺では、先祖のこと、仏壇のこと、位牌の継承関係等について、「ヌーヌアン（何がある）」というサンミンがおりてくると言うのである。必ずしも、自分のミフシでなくても、十二支の守り本尊を拝むことで、グونسグトゥ（元祖の事）等がおりてくるのである。

他方、Iさんのチジブンは、すでに見たところであるが、男女のチョーデーガミ（兄弟神）であり、たとえば、以前井戸や拝所があったところをつぶしてマンションや家が建っていても、元のものが見え、元どういうところだったというのが分かるということである。チジブンからは、カミ様が祀られていた、カミ様関係のものがおりてくると言うのである。

2. 3 沖縄的な方法の必要性

ウグワンの際には、沖縄的な方法でやらないとだめなのかということについても、訪ねてみた。

Mさん：お経だけではだめです。般若心経とかお経だけでは、ほんと、だめです。で、重箱備えないでね、七日七日したから、この家族の中にンマリ（サーダカンマリ）の子供がいて、亡くなった人が、ムヌフーサしていると言って、まだこっちにいらっしゃるよっていうのがあったらしいですよ。して、これB院さんに行ったら、そんなことはないと言わないでしょ。それをD寺さんに、それやらなくていいですかねと訪ねて来て、こんな夢見たけどって来る人が多いんですって。だから、沖縄の風習は風習でやらないといかんし、またシマによっても違う……。

Iさん：沖縄の民間信仰……ウチナーの先祖霊ね、ウチナーで作られたシマ

ウコウで通すわけですから、これはもう何百年前からなんですよ……
シマウコウ使って始めて通るし、告別式ここでやっている人たち、
ここにシマウコウウサギにくるのに、ウチカビもだめっていったら、
こんなのできませんよ、ウチカビでやる、ジョウノウとか。……

このように、沖縄の様々な行事、ウグワン（御願）、オガミ（拝み）等では、仏教的な方法では、だめだと、MさんもIさんも強調する。沖縄的な重箱、線香、ウチカビ等を用いなければ、先祖霊（と思われる）がまだ食事をしていない（「ムヌフーサしている」）ということになったり、ウグワン（御願）、オガミ（拝み）などが通らず（通じず）、またウチカビを用いなければグソーでのジョウノウ（上納）ができなくなり、先祖がグソーでこまることになるというのである。仏教のお経などでは、沖縄の場合通らない。沖縄の様々な行事、ウグワン（御願）、オガミ（拝み）等では、シマウコー、ウチカビを使うなど、沖縄の風習でやる必要があるというのである。

3 Iのまとめ

ここで、Iについていくつかの観点からまとめておきたい。

まず第1に、沖縄の民間信仰と仏教について、Mさんは仏教と沖縄は関係が強く、切っても切れないと述べている。これは、沖縄の先祖が唐旅（中国への旅）を繰り返しており、それによる手本（褒美、御利益）として観音を持ってきており、いわば断ちがたい強く深い因縁が生じ、結ばれているということだと考えられそうである。

第2に、しかし、だからといって、仏教の仏とチジファが同じというわけではない。Mさんは、チジファはカミとなった先祖であり、仏はミフシ（守護仏、守護神）であり、つまり、チジファは沖縄の先祖の系統だが、仏教の仏は別系統で、中国からのミチであると述べている。

第3に、チジファと守り本尊である虚空蔵菩薩との上下関係については、

Mさんは、基本的には両者の間で上下はないが（系統が違うので）、しかし、強いて言えば（というニュアンスかと思われるが）、自分のチジファよりは少し下がると述べている。それは、仏教が入ったのは「ナカヌユー（中の世）」からであるのに対して、Mさんのチジファはそれよりも古い由来を持ち、ガマユ（ウサチヌユー）からのものであるからだというのである。しかし、イマバンの判断を取る人は、仏教の仏よりも下がることになるとも述べている。Iさんの場合は、カミは数が限られていず、すべてカミサマになる（なれる）からという理由で、仏が上ではないかと述べている。また、カミアガイするまでの期間を念頭に置いた説明もしてくれたが、この点も仏が上という考えと関連しているかもしれない。

第4に、チジファと守り本尊の役割の違いについて、Mさんは、自身のチジファと守り本尊とでは、役割が違うと述べている。チジファは「イマバン」に関係し、またそれ以外にも、自分はカミバンであり、さらに「イマ、ナカ、ウサチ」の三つ持っていて、「今ぬ世、中ぬ世、大昔ぬ世（神ぬ世）も見る」とも述べている。自身のミフシである虚空蔵菩薩については、運勢等に関係しミフシの祈願を行うと述べている。Iさんは、特に盛光寺に言及しており、盛光寺では、先祖のこと、仏壇のこと、位牌の継承関係等についてサンミンがおりてくると言う。必ずしも、自分のミフシでなくても、十二支の守り本尊を拝むことで、グونسグトゥ（元祖の事）等がおりてくるのである。他方、Iさんはチジブンからは、カミ様が祀られていた、カミ様関係のものがおりてくると言っている。

第5に、MさんもIさんとともに、沖縄のウガミ（拝み）では、沖縄的な重箱（いわゆる^{ウサンミ}御三味等）、シマウコー（島お香）、ウチカビ等が必要で、仏教のお経等だけでは、沖縄の場合通らないと言う。この点では仏教との違いは明確で、沖縄のウガミは、沖縄の風習でやる必要があると言うのである。

以上のように見てくると、ユタはあくまで自身のチジファを信仰の中核としながら、仏教的な考え方、仏などを、いわばたくましく自らの信仰の内に

取り込んでいると言えよう。ミフシを中国からのミチとしながら、しっかり確実に自身のあるいはお客さんの守り本尊として、運勢、あるいはトートメー（仏壇、位牌）に関連したことについて、その力を仰いでいる。ユタの人たちの語りを聴いていると（「Mさん、生まれ年は寅ですから、虚空蔵菩薩ですよ。—はい、そうです、ミフシがですよ。—虚空蔵菩薩は、はもともと仏教の仏さんですよ。—だから、自分のミフシ）、守り本尊はミフシとして確実に沖縄的なものになっていると言えるかもしれない。

II 仏教から見たユタ

1 ユタと仏教の関わり—首里十二ヶ所巡り—

Iで見たように、沖縄においてユタと仏教の関係は深く、それは「首里十二ヶ所巡り」あるいは「十二ヶ所巡り」と一般的に言われる習俗によく表れている。この習俗は、一般者や、ユタ、あるいは、ユタとのお客さんといった、巡拝者達が、首里にある4ヶ所の臨済宗寺院、また、那覇にある真言宗寺院に参り、そこに安置された仏たちを礼拝・祈願するという習俗であり、参拝者は各自の干支に対応した仏たちを守護神として礼拝・祈願を行うというものである。

Iにおいては、そのような「十二ヶ所巡り」等を手がかりに、ユタの側から見た仏教や仏について考察した。このIIでは、逆に、寺院側はユタとどのような巡拝行為をどのように見ているのか、つまり、体系化された教義や組織化された集団（教団）を持たないとされるシャーマニズムに属するユタが、それとは対照的な、教義・教団を持つ世界宗教である仏教の寺院に礼拝・祈願に訪れるということに関して、寺院側はどのように考えているのかということについて考察する。

「首里十二ヶ所巡り」に関しては、もう少し具体的に説明すると、「首里十二ヶ所巡り」とは、「十二ヶ所巡り」とも言われ、十二支の守護神に祈願するため首里の臨済宗寺院を巡拝する習俗である。また、この習俗は那覇の

真言宗寺院でも行われおり、同寺院では、八尊全てが安置されているので、人によっては、十二ヶ所巡りはここだけでよいとも言われている。

また、十二支と諸尊との対応関係を見ると、子年－千手観音菩薩、丑・寅年－虚空蔵菩薩、卯年－文殊菩薩、辰・巳年－普賢菩薩、午年－姿勢菩薩、未・申年－大日如来、酉年－不動明王、戌・亥年－阿弥陀如来といった仏たちであり、以上の仏たちを守護神として、礼拝者たちは礼拝・祈願を行うのである。

この習俗に関する歴史的起源については、平敷令治によると⁽⁹⁾、18世紀の初めにまで遡れるというが、平敷はその出典を挙げておらず、執筆者も残念ながらその出典を確認していない。また、これらの守護神の配当は、次に説明する、本土における十二支守り本尊信仰におけるそれと同じであり、また、首里・那覇では、守護神のことを生まれ年の「ウカチミ」といい、さらに、「十二ヶ」は十二支の意味であって、十二ヶ所の寺院を意味するのではない。また、守護神が安置されている寺院には歴史の変遷があるが、現代では次の四ヶ所の寺院に安置されている。慈眼院－子・丑・寅・午・辰・巳の守護神、安国寺－酉、西来院－戌・亥・卯、盛光寺－未・申。

2 本土における守り本尊信仰

また、この習俗は、「一代守り本尊信仰」あるいは「守り本尊信仰」という習俗として、現在、日本の複数の地方、例えば、「武州寄居十二支守り本尊霊場」、「三河十二支霊場」、「さぬき十二支霊場」などにも見られる習俗であり⁽¹⁰⁾、その起源に関しては、一説によると⁽¹¹⁾、江戸時代の易学が関係の本、『天門八卦指南書』にまで遡れるとされ、さらには、中国周時代に大成した易である、周易の八卦が影響しているという見方もあるが⁽¹²⁾、確定的見解は得られていない。次に、直前に挙げた三つの霊場について簡潔に説明し、干支・寺院・宗派・守り本尊の順に挙げる。

2. 1 武州寄十二支守り本尊霊場

この霊場は、埼玉県北西部の大里郡寄居町において営まれ、同地方は、中世の城下町から発展し、近世には宿場町として栄えてきたと言われる。十二支の守り本尊を祀る八ヶ寺はいずれも寄居町内にあり、霊場の成立は昭和53年（1978）である。

子	善導寺	浄土宗	千手観音菩薩
丑寅	大正寺	曹洞宗	虚空蔵菩薩
卯	少林寺	曹洞宗	文殊菩薩
辰巳	正龍寺	曹洞宗	普賢菩薩
午	放光寺	浄土宗	姿勢菩薩
未申	正樹寺	浄土宗	大日如来
酉	浄心寺	浄土宗	不動明王
戌亥	西念寺	浄土宗	阿弥陀如来 ⁽¹³⁾

2. 2 三河十二支霊場

愛知県の三河市の寺院が集まって、昭和52年（1977）に開創している。各霊場とも病封じの霊効があり、地元では「医者いらず霊場」と呼ばれているという。

子	真福寺	天台宗	千手観音菩薩
丑寅	世尊寺	単立	虚空蔵菩薩
卯	天恩寺	臨濟妙心	文殊菩薩
辰巳	本光寺	曹洞宗	普賢菩薩
午	妙善寺	西山深草	姿勢菩薩
未申	崇福寺	西山深草	大日如来
酉	善光寺岡崎別院	単立	不動明王

戊亥 海徳寺 西山深草 阿弥陀如来¹⁴⁾

2. 3 さぬき十二支霊場

香川県西部の瀬戸内海に面し足した地方を中心に、昭和53年（1978）に開かれた霊場である。観光化されていない素朴な霊場で、各寺院とも人間的な触れ合いを大切にしているという。

子	長林寺	単立	千手観音菩薩
丑寅	神正寺	高野真言	虚空蔵菩薩
卯	海岸寺	真言醍醐	文殊菩薩
辰巳	長壽院	真言善通	普賢菩薩
午	歓喜院	真言善通	姿勢菩薩
未申	円明寺	真言御室	大日如来
酉	宝光寺	真言大覚	不動明王
戌亥	蓮台寺	高野真言	阿弥陀如来 ¹⁵⁾

3 ユタに対する仏教側の考え方

さて、では、ユタが各寺院に参拝に来ることについて、仏教の各寺院はどのように考えているのであろうか。

ユタの寺院参拝に対する寺院側の対応に関しては、稲福がすでに調査報告をしている¹⁶⁾。それによると、寺院側の対応は、〈伝統並存型〉〈純粹教義型〉〈融合強化型〉の三様に分類されるという。これらの内、本稿における調査対象である、A院、B寺に関しては、報告によると、〈伝統並存型〉に含まれ、さらに、稲福は、この〈伝統並存型〉に関して、「こうした対応、すなわち在来の信仰や習俗を折り合いがつく範囲で認め、従来の機能を保持する形」¹⁷⁾と見做している。確かに、二つの寺院に関する限り、そのようにまとめることができるであろう。

しかし、同報告では、仏教側が、どのような形で在来の信仰・習俗と折り合いをつけているのか、さらには、仏教側がどのような点で在来の信仰・習俗と異なるのか、といった問題に対して、具体的に仏教教理とシャーマニズムといった、思想的側面からの突っこんだ考察はあまり行われていない。

Ⅱでは、以上の側面を視野に入れたうえで、とくに、ユタが各寺院に祈願に訪れることに対する、仏教側の考え方を、A院の住職とB寺の住職の二人の住職の方にインタビューした結果に基づき、ユタが寺院に祈願に訪れることに対する仏教側の考え方の一端を明らかにする。

3. 1 A院

<仏教とユタの相違点>

浜 崎：今、本堂を拝見させていただいたら、ユタの方も何組が来て、お祈りしていく感じでしたけれども。

住 職：うちのお寺の場合には、参拝は自由ですので、沖縄の方で外人さんでも、自由に参拝してくる。また、クリスチャンの方でも、どうぞ自由にお参りしてくださいということで、……ただ、ユタにはユタの考え方があると思うんですよね。だからといって、ユタさんの教義はないんですよね。教義がないのでどういうことをユタさんは考えて信仰しておりますか？とか、どういうことを指導しておりますか？とか、と、いった場合には、教義がないから、その話は聞けないと思うんですね。

住職さんは、お寺の参拝は誰でも自由であり、ユタ、外人さん、クリスチャンの方等、「どうぞ自由にお参りしてください」という立場であることを述べている。しかし、やはり、ユタと仏教とでは考え方に相違点があり、ユタには、ユタの考え方があるが体系化された教義がないのに対し、仏教ないし臨済宗には体系化された教義があるという点で違いがあるとしている。

<ユタの教化について>

安次嶺：例えば、その、信徒さんにユタがいる場合に、……最終的には禪の考え方に導くっていうか、教化してゆくというふうには考えないんですか。……

住 職：ま、……なかなかそれは一致していきにくいというところがあると思いますね。また、ユタの人もやっぱり、自分自身はいろんな靈感があるとかいうようなことで、100パーセント住職のいうことは受け入れないと思いますね。彼らは彼ら一本道でいくと思うんですね。だから、そういったことをどうしていくか、ということは、ま、D寺さんも考えていると思うんですけど。だけど、うちの場合には、そういった人たちはそんなには、いないですね。会員の中に入っているってことは。

安次嶺：じゃ、一般の方のほうが、ここは多い？

住 職：参拝はそのかたがたも来ますけれども、お寺との繋がりという面では、だから、お寺で行事があるよ、講演会があるよっていったって、来て下さいといっても、来ないですよ。人の話聞こうとしないですよ。こちらではですよ。D寺さんでは聞くとお思いますけどね。

A院の住職さんは、ユタに対して、ユタの状態のまま受け入れるというよりも、最終的には彼らを教化しようと思っているようであるが、しかし、それはユタの場合独自の靈感があるというようなことで困難な面があり、参拝には来ても、寺の行事、講演会等にはなかなか参加しないということである。

<寺院内でヒラウコウ、ウチカビを焼かせない理由>

安次嶺：最近、C院さんの方、お参りさせていただいたんですけど、あの、張り紙があって、あの、ヒラウコウはだめですとか、あと、ま、ウチカビもだめと書いてありました。……それは、あれですかね。やっ

ばり、自分達の教義を貫くということなんですかね。

住 職：それとは違うと思うんですけどね。ええ、うちでもそれを使用させないようにしています。と、いうのは、これぐらいの箱の中でね、沖縄線香つけますでしょ、壁が傷んでしまいますよね。沖縄の線香使うと、一人だけだったらいいけど。10名も20名もそこへ来るとね、線香はね、ものすごく火力強いですからね。だから、それはだめだと。それから、ウチカビもお供えしてもいいんですけどね。燃やすんですよ。そこで。

浜 崎：燃やさないと、向こうまで通らないという考え方だから。

住 職：うちも今、納骨堂新しくなったんですけど、新しくなったところで燃やされましてね。

寺院内で、沖縄のヒラウコウ、ウチカビを焼かせない理由は、必ずしも臨済宗の教義に関わるのではなく、それらは火力が強すぎて、壁を傷つけたりすることがあるのでというものであった。実際、以前、火をつけて拝みをした人が小火を出したことがあるということである。納骨堂の入り口には、使用上の注意と共にその小火の写真が貼ってあり、注意を喚起している。

<ユタは仏教ではない>

住 職：仏教の中に、ユタの人は入らないですね。ユタさんは仏教ではない訳です。じゃ、どの教えかと言うと、どの教えと教義がないものですから、解らないんですね。で、いろんな、あの、昔の沖縄の御嶽信仰とかはありますよね。あちら行ったり、こちら行ったり拝みする、そういった人たちもいるし、この宗教がいろんなものが入り混じっている訳です。で、入り混じったのが、皆の私達の生活の中に入ってきていますから、だから、この場合はこうしよう、あの場合には、ああしようとかですね、いろいろそこで、ごちゃまぜの、チャ

ンブルー宗教、文化というのが入ってきて、非常に指導しにくい面もありますね。

住職さんは、ここで、はっきりとユタは仏教ではないと言い切っている。ここに、われわれはユタと仏教との間の決定的差異を見ることができるだろう。そして、その理由は、先にも出てきたように、臨済宗には、体系化された教義があるが、ユタには、体系化された教義がないことである。

<法話と、それに対するユタの反応>

安次嶺：ところで住職さんは、法話とかなさいます？法話というか説法……

住 職：法話は時たま……

安次嶺：あ、そうですか。そしたら、その、それを聞きに来られる方というのは、あの、ユタの方もいらっしゃいますか。

住 職：ユタの方はほとんど聞きに来ないですね。……

浜 崎：仏さん拝みに来てるんだから、話も聞きに来たらいいと思いますけどね。

住 職：ただ、その人たちにうちのご本尊様の名前解かりますかと聞いても、ご本尊様の名前は解からないというのが、また、あるんですね……

住職さんは、年に2回、法話を行なうと言う。仏教にとって法話とは、難しい仏教教義を理解しやすくし、すべての人々を救済するための手段、すなわち、方便である。住職が法話を行っているということは、つまりは、民衆を教化しようとしているということであるが、しかし、ユタは、ほとんど参加していないというのが実情であるようだ。

3. 2 B寺

<ユタの十二ヶ所参りについて>

浜 崎：拝みしに十二ヶ所廻りで来るわけですけど、で、そのことに対して
どういう風に、思われているかというか、

住 職：わたしは、ね、基本的にはですよ、先生、沖縄という地域性からし
てね、この、そのいわゆる文化、本土とは違う、まあ、要するに、
異文化、そういう視点に立つとね、あの、郷に入らば、郷に従えと
いう論理がごとくね、こっちでその、沖縄で純粹仏教を語ろうとし
てもね、それは、非常に難しい面があるんです。

⋮

住 職：ただ、お寺側としてはですね、ユタさんがお参りに来る。……ミッ
クス宗教だから、いわゆるチャンボン文化だから、それは、こっ
ちに来て、例えばですよ、……神宮・神社行くとこうやるんですよ
(注：二拍一礼のしぐさ)。こっちきてやるんですよ。しかし、それ
見てね、あ、こっちは神社じゃありませんよ、とあえて言いません。
……これもよし、あれもよしっていう、だから、ユタも容認という
ことになるじゃないんですか。

住職さんは、沖縄の地域性、独自の文化を考えると、沖縄で純粹仏教を語
ることは、困難であると考えている。(沖縄も日本も) いわばミックス宗教
だから、ユタも容認ということでもいいのではないかと述べている。

<寺院内でヒラウコウ、ウチカビを焼かせない理由>

安次嶺：その、ウチカビを焼くとか、止めてくださいといいますか。そうい
うのは、させない……

住 職：うん。あの、線香もこっち来ると、立てません。また、香炉も準備

されていません。

浜崎・安次嶺：ああ、

住 職：そうですよ。これは、線香は沖縄のヒラウコウ、やってはいるんですけどね。内容は解らないんですけどね。それぞれ、違うみたいよ、個人的には。……お寺では、参拝者は全体として火をつけないという事になっているわけ。つける場所ではないわけですよ。

寺院では、ヒラウコウやウチカビを使用しても良いが、火をつけて焼くのは禁じているということであり、その理由として、寺院では参拝者は全体として火をつけてはいけないからと述べている。先のA院の住職とは若干理由が異なるが、両者に共通するのは、先にも述べたように、必ずしも臨済宗の教義に基づいてそうしているのではないということである。

<ユタ信徒のあり方>

安次嶺：あの、で、住職さんは、結局、あの、ユタの現時点のあり方をそのまま認めて、そのままの状態で置いとこうと思っているのか、それとも、一旦は受け入れるんだけど、そっから、究極的には、禅の教えに導こうという意図があって、徐々にかもしれないけれども、こう、教化してゆうこうと思っているのか、どっちですか……

住 職：それは、あの、難しいですね。やっぱしね、さっき申し上げましたけどね、あの、郷に入れば、郷に従えと。やっぱし、その地域性があるさ。しかも、歴史が古いさあ。背景があるユタの、ね、あるいは祖先崇拝、ユタとは言わないほうがいいかもしれないが。祖先崇拝が濃厚さ。だからそこにねえ、ええ、インドの仏教持ってきてさ、よし、わたし、布教してやるぞ、とかね、仏に帰依させてゆく、これはね、……いかなと思いますよ。それはなぜかと言うとね、大乘仏教というのがあるでしょ……地域のいろんな慣習とかね、ある

いは、場合によっては宗教も巻き込んでいって、だから、チベットではラマ教というでしょう。……大蔵経も……あれもね、チベット訳のすごい、その、あの、大蔵経をもっているわけです。

安次嶺：チベットもありますね。カンギュル、テンギュルってあります。

住 職：大正新脩大蔵経、日本ではそれです。そういった、この、地域を巻き込んでいくっていうのかな、その、習合してゆくというのかな……1世紀に中国にわたった仏教は……モンゴルに行く、ブータンに行くし、朝鮮に行って……日本に入ってくる。で、沖縄に入ってくるわけ。そのルートの中においてはね、たくさんのいろんな問題がでてくると思うんですよ。それをさあ、沖縄に来てさ、純粋な小乗仏教みたいだね……これは、しょせん無理な話なんですよ。ですから、ユタを教化してゆくとかね、これはもう、とても、とても。

インタビューのこの時点までは、住職の話からは、純粋仏教の教えを説いて、ユタを教化してゆく可能性については消極的な態度であることが窺える。しかし、経典の内実を解りやすい表現で説いてゆくことも、広い意味では、まさに、仏教徒によるユタを含んだ民衆教化と考えられ、次に見るように、住職さんもそのことに同意している。

<現代仏教徒によるユタを含んだ民衆教化>

安次嶺：例えば、それは、おっしゃるとおり、とっても難しいと思いますけど、例えば、こう、あの、住職さん、般若心経の法話とかなさっていますよね。そのことも、ひとつの導こうとしていることと思うんですよ。要するに、直接、おいでじゃなくて、例えば、仏教はこんないいところもあるよ、とこう……それで、ユタさんが……

住 職：あれはユタであるはずだがという感じの人がいるわけよ。そりゃ、般若心経だから、かどうかは解らんよ。仏教とはどんなものかなあ

という興味かもしれませんしね。そういう、何回かありますよ。ユタの方が参加して、それは大変いいことだと思う。

安次嶺：わたしが言いたいのは、そのレベルというか、その辺で、こう、多分、ユタさんは、仏教教義ほとんど解からないと思うので、それを、その解りやすく、住職さんとか法話しているときに、どんなもんかなあ、みとどけてみたいなと思っただけでも、わたしはこの人の中では、あるひとつの開花、その変化が起こっていると思うんですよ。やっぱり、その人の中で距離が近くなってゆくって言うかね、そういう大きな意味で、こう、なんていうんでしょう……

住 職：そうですね。それはありますよ。やっぱり、生身の人間ですからね。ユタといえどもね。そりゃもう、煩惱も執着心もありますよ。一日生きて生活しているわけですからね。仏教の教えはいいなあというような、なんか、こう、感ずるだけでもね、収穫あるわけですよ。

4 IIのまとめ

以上、「首里十二ヶ所巡り」とは何か、ユタに対する仏教側の考え方について考察してきたが、とくに、ユタに対する仏教側の考えかたを、いくつかの視点から纏め、簡単に考察を加えておきたい。

まず第1に、仏教とユタの相違点であるが、A院の住職さんは、ユタにはユタの考え方があるにしても、体系化された教義がないのに対し、仏教ないし臨済宗には体系化された教義があると述べている。住職さんは、はっきりとユタは仏教ではないと言い切っている。

もちろん、住職さんも述べているように、ユタにもきわめて緩やかな形のものであるが、ユタの間である種の一致した考え方はある。先祖崇拝の重要性や災因観（御願不足等々）などが例としてあげられるだろう。しかし、それは仏教のように明確に体系化されたものではなく、その違いはやはり決定的であるということであろう。

第2に、ユタの十二ヶ所巡りについてであるが、A院の住職さんは、お寺の参拝は誰でも自由であり、ユタ、外人さん、クリスチャンの方等、「どうぞ自由にお参りしてください」という立場であるということ述べている。B寺の住職さんは、沖縄の地域性、独自の文化を考えると、沖縄で純粋仏教を語ることは、困難であると考えており、ユタがお参りに来ることも、神仏習合ということもあるし、いわばミックス宗教だから、ユタも容認せよということになるのじゃないかと述べている。部分的であっても良いから、仏教の力を借りるとするのはユタさんであろうが誰であろうが良いと思うと述べ、来るものは拒まず去る者は追わず、という考えが基本にあると言う。

両住職さんともに、誰にでも自由な参拝を認めている。特にB寺の住職さんは、沖縄の独自性を考えるとき、部分的であってもいいから仏教の力を借りるとすることに（実際、Iで見たようにユタの人たちは、守り本尊をミフシとしてその力を頼んでいる）仏教の側からも意味を見出しているようである。

第3に、それにしても、ユタに対して、ユタとしての現状のまま仏教として受け入れるということなのか、それとも最終的にはユタの人たちを教化しようということなのかという点については、次のようである。

A院の住職さんは、ユタの信徒に対して、ユタの状態のままで取り入れるというよりも、最終的には彼らをできれば教化しようと思っており、その考えは、D院の住職も同じだろうと言う。しかし、それはユタの場合独自の靈感があるというようなことで困難な面があり、参拝には来ても、寺の行事、講演会等にはなかなか参加しないということである。ただ、A院ではユタの信徒、会員はあまり多くないとも述べている。B寺の住職さんは、この点について、純粋仏教の教えを説いて、ユタを教化してゆくことは極めて困難であると考えていることが窺える。しかし、法話等によって、経典の内実を解りやすい表現で説いてゆくことも、広い意味では、まさに、仏教徒によるユタを含んだ民衆教化と考えられ、住職さんもそのことを認めている。

以上のようにであれば、多少のニュアンスの強弱はあるが、両住職さんともできればユタの人たちを教化したいが、無理矢理に行うわけにもいかず、法話等によってユタも含めた民衆の教化を行っているということになる。しかし、ユタの冲縄的な独自性を考えると、ユタを教化していくことにはかなりの困難があると述べており、仏教とユタの考え方の違いを認めながらも、無理にその違いを解消しようとするのではなく、容認する姿勢をとっている。

第4に、沖縄のヒラウコウ、ウチカビに対する考え方、特に寺院内で火をつけさせない理由に、仏教の側の教義との関連があるかどうかという点については、次の通りである。

A院では、寺院内で、沖縄のヒラウコウ、ウチカビを焼かせない理由は、必ずしも臨済宗の教義に関わるのではなく、それらは火力が強すぎて、壁を傷つけたりすることがあるのでというものであった。実際、以前、火をつけて拝みをした人が小火を出したことがあるということである。B寺では、ヒラウコウやウチカビを使用しても良いが、火をつけて焼くのは禁じているということであり、その理由として、参拝者は寺院では全体として火をつけてはいけないからと述べている。A院とB寺では、若干理由が異なるが、両者に共通するのは、小火の危険性といった実際的な理由であり、必ずしも臨済宗の教義に基づいてそうしているのではないということである。

終わりに

ユタと仏教の関係について、ユタの側の視点および仏教の側の視点から、それぞれ見てきた。ユタの側からは、仏教と沖縄の関係の深さが強調されている。しかし、だからといって、仏教の仏とチジファが同じというわけではなく、チジファはカミとなった先祖であり、仏はミフシ（守護仏、守護神）である。チジファと守り本尊は異なった役割をもっており、ユタの人たちはあくまで自身のチジファを信仰の中核としながらも、仏教的な考え方、仏などを、いわばたくましく、しかし、恐らく時にはすがりつく思いで、自らの

信仰の内に取り込み、自らのものとしていると言えよう。

他方、仏教の寺院の側からは、十二ヶ所巡りについては、寺の参拝は誰でも自由であり、ユタも「どうぞ自由にお参りしてください」という立場である。そして、部分的であっても良いから、参拝して仏の力を借りるというのはユタであろうが誰であろうが良いと思うとも述べ、十二ヶ所巡りに対して仏教の側からも意味を見出しているようである。また、それにしてもできればユタの人たちを教化したいが、無理矢理に行うわけにもいかず、法話等によってユタも含めた民衆の教化を行っているということである。ユタの沖縄的な独自性を考慮し、違いを認めながらも、無理にその違いを解消しようとするのではなく、容認する姿勢をとっている。いわば、そこには仏教の懐の深さが示されていると言えるかもしれない。

注

- (1) ユタという言葉は、周知のように、沖縄では軽蔑的なニュアンスで使われることも少なくない。本稿で紹介するユタのIさんは、ユタという言葉はやはりあまり好きではなく、むしろウグワンサー（お願をする人）と言われる方が良いと述べている。しかし、本稿では、慣例に従って、ユタという語を使う。もちろん、軽蔑的な意味は全くなしで用いる。
- (2) ユタに相談に来る人、クライアントをユタの人たちはお客さんと呼んだりする。
- (3) 筆者等は特に数を数えることはしなかったが、稲福みき子「沖縄の仏教受容とシャーマンの職能者」（『宗教研究』日本宗教学会第71巻312第1輯1997年6月）pp.163～168）によれば、安国寺における12日間の調査で、巡拝総数は1024組、1634人であり、単純に平均すると1日あたり85組、136人となる。
- (4) インタビューの箇所はほぼ忠実に再現する形で紹介するが、プライバ

シーに関わる部分は多少の変更を加えてある。また、会話のやりとりにおける相づち等も適宜省略してある。以下、本稿のインタビューの箇所は同様である。

- (5) 万松院は1990年に十二支寺を返上し、それまで祀っていた卯の守り本尊である文殊菩薩が西来院で、辰・巳の守り本尊である普賢菩薩が慈眼院で祀られるようになっていく。守り本尊については、本稿の「Ⅱ 仏教から見たユタ」を参照。
- (6) 他にも、ユタによってチジファは、たとえば、北山系のカネマン（鍛冶屋）で男ガミであったり、ミフシ（御星）のカミ（十二支の生まれ年に応じた守り神）、13代上の先祖、14代前の祖先が拜んだリュウグーシン（龍宮神）であったりする（大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』、弘文堂、平成10年、pp.78～79）
- (7) 『ユタと霊界の不思議な話』 pp.130～131では、あるユタがチジファと仏教の仏との関係について次のように述べている。「わたしは、先祖霊すなわち仏や神、とは思っていません。先祖霊と仏や神はまったく位が異う。別の次元でしか考えられないと思います。わたしは、どんな遠い昔の先祖であろうが、父母のような親しみや人間的なものを感じます。……しかし、仏や神に対してはそうではありません。一〇歩も二〇歩もさがって、かしこまるという気持ちです。そして、何か困ったときは、お力をかけてくださいと、すがりつく思いで祈る。先祖霊に対しては、悩みがあっても、うち明けて智慧をかりるといいうほどの気持ちしか持ちませんが、仏や神々には助けてくださいと祈る。全知全能だと信じているからです。」
- (8) いわゆる十王信仰、十三仏信仰との関連を窺わせるものであろう。
- (9) 平敷令治「十二ヶ所巡り」（『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社、1983、pp.375-376、所収、以下、『沖縄大百科事典』）。また、十二ヶ所巡りに関しては、真境名安興『真境名安興全集 第三巻』琉球新報社、1993、pp.139-140、稲福みき子「沖縄の仏教受容とシャーマンの職能者」（前掲

論文)、長谷部八郎「沖繩と仏教」序説—沖繩における仏教の歴史と現状—
 (『駒澤大学仏教学部論集』第27号、駒沢大学仏教学部、1996、pp.169—
 183)、も参考にした。

- (10) 大法輪閣編集部『全国霊場巡拝事典』大法輪閣、1997 (以下、『全国
 霊場巡拝事典』)、pp.392—394。
- (11) 秋月慈童『詳明 守り本尊読本』株式会社原書房、2005、pp.2—4。
- (12) 『全国霊場巡拝事典』、p.392
- (13) 『全国霊場巡拝事典』、p.393
- (14) 『全国霊場巡拝事典』、p.393
- (15) 『全国霊場巡拝事典』、p.393
- (16) 稲福みき子、前掲論文、pp.174—179。
- (17) 稲福みき子、前掲論文、p.176。